

発表日	平成 29 年 10 月 25 日 (水)	発表形式	講演 or ポスター展示
所属・氏名	(公財) 横浜市緑の協会 よこはま動物園 松山薫		
発表名称	体験型プログラム「なりきり獣医さん」の企画から実施まで		
ジャンル	動物園	部門	事業事例

体験型プログラム「なりきり獣医さん」の企画から実施まで

はじめに

よこはま動物園では小・中学校の団体向けにゾウ舎のバックヤードツアーや、教室で行う座学の学習プログラムを、通年で受け入れている。しかし、内容は毎年少しずつ更新するのみで、数年間大幅な変更を行ってこなかった。これまでのプログラムは小学校低学年を対象とした所要時間 30~40 分の座学が多かったため、新規プログラムは「体験型」をキーワードに、需要の多い「動物園の獣医」をテーマに企画することにした。対象学年は過去の実績より、受け入れ件数の多い小学校低~中学年を想定し、定員は 35 名を上限に設定した。小学校 2 年生の国語の教科書に、当園の獣医が執筆した「どうぶつ園のじゅうい」という単元があるため、授業の事前・事後学習に取り入れてもらう事例を視野に入れ、プログラムの内容を考えることにした。

プログラム内容の構築

実際の獣医の仕事内容は多岐に渡るため、40 分という限られた時間の中で全てを伝えるのは極めて困難である。そこで、子どもたちにも身近な内容を結びつけ「動物たちの健康診断」をテーマに取り上げることにした。小学校低学年の児童たちに伝えるためには、体験した内容を印象付ける事が重要だと考え、当園のロゴ入り子供用白衣準備することにした。5~6 人で 1 つのチームを編成し、1 種ずつ健康診断を行う動物が割り当てられる。1 人 1 枚のカルテを配布し、子どもたちのモチベーションを上げ、チーム毎にマイクロチップの読み取り、計測、心音の聴き取り、予防接種の 4 つの項目を行うことにした。

生体を用いた授業が最も効果的と考えられるが、動物アレルギーの子供が少なくないことを考慮して、リアルな動物のぬいぐるみを用いることとした。



図 1 マイクロチップの読み取り



図 2 メジャーを使って身体の計測

マイクロチップの読み取りと計測

動物園では個体識別をする為に、多くの動物にマイクロチップが装着されている。実際に使用しているマイクロチップとリーダーを用いて、ぬいぐるみの背中にかざすと、10 桁の番号が表示される。番号の一覧表から、読み取った番号を探すことで、これから健康診断をする個体の名前を確認することができる。名前を知ることによって、親近感を持って接することができるようになる。(図 1)

次にメジャーを使って、身体の計測を行う。チームの仲間と協力しながら、カルテの空欄を埋め込んでいく。(図 2)

心音の聴き取りと予防接種

心音の聴き取りは、まず自分の心音を聴診器で聴き、次にぬいぐるみの心音を聴いてみる流れである。ぬいぐるみの内部には実際の動物から録音をした心音が ICレコーダーによって再生されている。子どもたちは最初、半信半疑で聴診器を当てているが、心音が聴こえると急に笑みがこぼれるのが印象的である。ウサギの心拍数は 1 分間に平均 130～320 回で、平均 70～110 回の小学生よりも 2～3 倍以上早い心音である。自分の耳を使って聴くことで、ぐっと子どもたちに印象付けることができる。(図 3)

最後の予防接種でも、本物の注射器を実際に手に取って体験してもらう。様々な大きさの注射器を並べることで、子供たちの興味を引き出すことができる。薬剤を使用することができないが、空気の薬を指定の量だけ注入し、ぬいぐるみの保定をする係と注射を刺す係に分かれて予防接種を行い、全てのプログラムが終了する。(図 4)



図 3 心音の聴き取り



図 4 予防接種を体験

参加した子どもたちの反応

40 分程度の体験であるが、やはり自分たちの手や体を動かして行うプログラムは子供たちがとても積極的に取り組むことができ、「楽しかった」という感想がこれまでの座学プログラムよりも多く聞かれるようになった。白衣を着用することでプログラム名の通り、子どもたちが獣医になりきることができ、やる気が一気にあがるのを感じた。動物の心音なども「時計の秒針と同じぐらいの速さで、自分よりも速かった。」など、五感を使って体験することで具体的な印象を残すことができた。

今後に向けて

プログラムの性質上、一度に大勢の人数に対応することはできないため、興味を持ってもらった学校でも実施を諦めてしまう事例もある。今後は積極的に当プログラムを学校団体へ周知し、受け入れ件数を増やしていきたいと思う。

【協力者】

よこはま動物園事業推進係 須田朱美、渡辺海咲、麻生千晶、安部慶太郎、野村美佳